教育長報告（１）別冊

「子どもの参画が地域・学校・家庭をつなぐ」
―世代を超えてかかわり合えるしくみづくり―

（意　見　書）

平成２８年４月

第３３次宮城県社会教育委員の会議

目　次

はじめに　…　1

Ⅰ　子どもが地域活動に参加・参画することの意義　－子どもは地域の担い手である－　…　2
1　子どもが変わり，地域が変わる
2　地域がつながり，世代が交わる

Ⅱ　子どもの地域活動への参加・参画に関わる現状と課題　－子どもの姿を捉える－　…　3
1　地域に関わりたい子ども
2　子どもを地域活動に向かわせるもの
3　子どもの地域活動への参加・参画を進めるためには

Ⅲ　具体的な方向性　－世代を超えたかかわりをもつ－　…１２
1　世代を超えたかかわりをもつためのしくみ
（1）組織づくりから入ろう
事例　仙台市東中田地区の子育て環境づくりの取組
（2）活動の場を学校から地域に広げよう
事例　宮城県佐沼高等学校の部活動単位の取組
事例　仙台市立八木山中学校のボランティア活動の取組
事例　宮城県亘理高等学校の生徒会の取組
（3）地域の課題（テーマ）を解決しよう
事例　村田町の祭り活性化の取組
事例　仙台市八木山地区の地域防災の取組
事例　登米市の地域貢献活動推進の取組

2　かかわりを深めるために（子どもの声を受けて）　…１８
（1）子どもの思いを伝える機会や場をつくる
（2）子どもとパートナーシップをむすぶ
（3）ジュニア・リーダーとのつながりを大切にする
（4）子どもと地域をつなぐ
（5）子どもの背中を押してあげる

資　料
1　参考資料　…２１
2　審議の経過　…２２
3　第３３次宮城県社会教育委員名簿　…２４

はじめに

学校教育であれ社会教育であれ，本来，子どもに対する教育とは，子どもの可能性を引き出し，力を伸ばそうとする営みである。そうした教育の支えとなるのは，子どもの可能性を信じ，取り組む姿や成果を認め，その力を発揮できる機会を確保することである。

第３３次社会教育委員の会議では，「子どもの参画が地域・学校・家庭をつなぐ−世代を超えてかかわり合えるしくみづくり−」をテーマに，中学生や高校生を対象として議論を進めてきた。このテーマは，前次（第３２次）の社会教育委員の会議のテーマである「地域をつくる子どもたち」を引き継ぎ，子どもの地域活動の推進の在り方に関する審議に取り組んだものである。

前次（第３２次）の社会教育委員の会議の意見書「地域をつくる子どもたち」は，「子どもも大人と同じ地域の一員であり，大人とともに地域をつくる主体として活動する力を本来持っている」という子ども観のもとにまとめられている。県内では，この提言を具現化するように，中学生や高校生が「今，自分たちにできる事は何か」と考えながら，地域活動に取り組む姿が以前よりも認識されるようになってきた。一方で，子どもの地域活動に広がりが見られない地域や学校もあることが課題として認識された。このことは，子どもの地域活動への参加・参画を進める具体的な手立てが分からないことに起因するのではないかと考え，テーマを設定した。

本会議では，地域活動に取り組んでいる中学生や高校生の姿や思いの中に，子どもの地域活動への参加・参画を進めるための具体的な手立てに結び付くヒントがあると考え，アンケート調査や聴取調査により，積極的に子どもの声を拾い上げた。本意見書で取り上げた子どもの地域活動への参加・参画の事例では，一人ひとりの子どもの声に大人がしっかりと耳を傾け，子どもの声を生かすための大人の受け皿がしっかりと位置付けられていた。

現在，県内各地で進められている東日本大震災からの復興や地方創生などの取組においても，子どもや若者の声を積極的に生かしていくことによって，地域の担い手が育ち，持続性のある取組が可能になる。

今後の子どもの地域活動への参加・参画の推進には，子どもを取り巻く大人の意識と取り組み方が大きく関わってくる。本意見書がより多くの大人の目に触れ，その趣旨が理解されるとともに，地域や学校の状況に応じたさまざまな「しくみづくり」が工夫され，実践されていくことが重要となる。

本意見書を受け，地域や学校において，子どもが自らの意見を積極的に表明し，それを大人がしっかりと受け止め，対話しながらともに地域をつくる取組が広がって欲しいと願うものである。

第Ⅰ章　子どもが地域活動に参加・参画することの意義
ー子どもは地域の担い手であるー

ここでは，子どもが地域活動に参加・参画することの意義について，子どもの視点を中心にするとともに，地域の大人の視点も加えながら明らかにしていく。

1　子どもが変わり，地域が変わる

（1）子どもの変容

子どもは，地域活動に関わることで，達成感や成就感を味わうとともに，地域に対して「もっと自分にできる事はないか，より地域をよくしたい」という思いを強くしていく。さらに，関わった仲間や大人からの評価（認められ，褒められ，励まされるなど）によって，子どもは，自己有用感や地域に対する愛着心を高め，地域における自分の居場所や，地域・学校・家庭と自分との関わりを実感していく。

（2）地域の変容

大人は，子どもと協働して地域活動を進める中で，子どもの力を見直し，改めて子どもを地域の一員として認識するとともに，関わった大人同士も互いのつながりを深めていく。

また，子どもと大人が協働して地域活動に取り組むことの意義が地域の中で共有されることにより，子どもの地域参加を促すための環境整備を，学校や家庭も巻き込んで進めることができる。

2　地域がつながり，世代が交わる

（1）地域活動の中での学びと担い手の育成

子どもは，地域活動を経験することによって，様々な世代との関わりから，コミュニケーションの大切さや他者と交わることのよさ，難しさを学ぶことができる。さらに，子どもがその発達段階に合わせて，地域との関わりを重ねていくことにより，大学生や社会人となった後も，地域の一員として力を発揮できる存在となる。このことは，地域の担い手を継続的に育成することにもつながっていく。

（2）子どもの参加・参画と地域のつながり

子どもの地域活動への参加・参画のきっかけは，行政や社会教育施設，町内会等からの働きかけが多いが，学校からの働きかけによる取組も増えてきている。さまざまな主体からの働きかけにより，子どもの取組や成長に多様性が生まれるとともに，新たな人間関係や地域のつながりが生まれ，地域・学校・家庭の連携や地域の活性化が促進される。

第Ⅱ章　子どもの地域活動への参加・参画に関わる現状と課題
ー子どもの姿を捉えるー

ここでは，中学生や高校生及び保護者，教員，地域住民を対象として行ったアンケート調査の集計結果及び聴取調査等の結果から，以下の点について確認するとともに，子どもの地域活動への参加・参画を進めるためのポイントを示していく。

○　子どもが地域をどう捉えているか
○　子どもの地域活動に対する意識はどうか
○　子どもを取り巻く大人の地域活動に対する意識はどうか
○　子どもを地域活動に向かわせるものは何か
○　子どもが地域活動に参加・参画しやすくするための条件は何か

＜調査の概要＞

1　アンケート調査「中学生・高校生の地域活動への参加・参画に関する調査」

①　調査目的

子どもの地域活動への参加・参画に関する現状と課題を探り，子どもの参加・参画を促進するために必要な環境整備の在り方を明らかにする。

②　調査期間

平成２７年３月１６日（月）～　平成２７年４月１７日（金）

③　調査対象

・県内３地域（沿岸部，内陸部，仙台市）から抽出した中学校（６校）の１・２年生及びその保護者，高等学校（４校）の２年生及びその保護者
・県内３地域（沿岸部，内陸部，仙台市）の抽出したジュニア・リーダー６団体
・調査対象中学校，高等学校の教職員
・調査対象中学校，高等学校の所在地域の行政・住民・ＮＰＯ等

2　聴取調査

①　調査目的

子どもと大人からの聴取によって，地域活動に参加・参画することによる子どもへの影響，効果を探るとともに，子どもの地域活動への参加・参画を促進するしくみの在り方について明らかにする。

②　調査期間

平成２７年９月７日（月）～　平成２７年１０月５日（月）

③　調査対象

・特色ある地域活動を展開している団体や学校
・中学生及び高校生，教職員，地域活動の中心団体の構成員

1　地域に関わりたい子ども

（1）子どもの意識と現状

①　地域をよくしたい（子どもが望む地域像）

中学生や高校生を対象としたアンケート調査の自由記述から，子どもたちが望んでいる地域像は次のとおりである。

自由記述：「将来どんな地域にしていきたいか」

- 伝統を残しつつ，きれいで都市化が進んでいる地域
- 少子高齢化時代を支えていく若者や子どもの居場所（活動場所）がある地域
- 震災からの復興，復旧を進め，明るいあいさつが行き交う活気ある地域
- 老若男女が関わり合ってつながりを持ち，誰もが住みやすい地域

子どもが描く地域像は，地域のよさや課題を的確に踏まえたものであり，今住んでいる地域をよくしたいという思いが伝わってくる。このことは，関わる機会があれば，地域活動に参加・参画する意識を潜在的に持っていることを示している。

この思いは，子どもが地域の一員として地域をつくっていく原動力になりうるものである。

②　地域活動をやってみたい（子どもの地域活動の経験や活動意欲）

中学生や高校生になってからの地域活動への参加について，中学生では46.3％が，高校生では21.3％が経験している。(図表1)

また，現在の地域活動の経験の有無に関わらず，中学生や高校生の約50％は今後地域活動に参加・参画したいと考えている。(図表2)

今後参加・参画したい理由としては，中学生，高校生ともに，「地域のため」「自分の成長になる」「将来に役立つ」という回答の割合が高くなっている。(図表3)

これまでに参加した地域活動や今後参加したい地域活動では，「地域の祭り・伝統文化」「地域の清掃・緑化」「スポーツ活動」など身近な取組の割合が高い。また，高校生が参加したい活動として，「震災後の復旧・復興活動」の割合も高く，震災後の地域の再生に向けた地域活動への参加意欲も感じられる。(図表4)

中学生，高校生は，地域活動に参加・参画することの意義を理解しており，今後の地域活動に対する関心や参加意欲は十分にある。特に，地域活動の経験がある子どもは，これからも活動したいという意欲が高い。

図表1　中高校生になってからの地域活動への参加の有無

現在の参加経験	中学生（%）	高校生（%）
ある	46.3	21.3
ない	53.7	78.7

図表2　今後の地域活動への参加・参画の意向の有無

今後の意向	中学生（%）	高校生（%）
参加したい	53.3	47.3
特に参加したいと思わない	46.7	52.7

図表３　今後，地域活動に参加・参画したい理由（複数選択）

参加したい理由	中学生（%）	高校生（%）
自分の成長になる	50.3	50.4
将来に役立つ	49.4	59.3
地域のため	64.1	50.6
人間関係の広がり	41.0	48.1
家族が参加	4.8	2.2
地域の人が喜ぶ	41.7	27.0
楽しそうだから	33.9	24.3
友達が参加	13.1	2.7
その他	2.5	2.0

図表４　今後，取り組みたい地域活動（複数選択）

今後取り組みたい活動	中学生（%）	高校生（%）
地域の祭り・伝統文化	49.9	36.1
地域の清掃・緑化	22.3	24.4
防災訓練	10.0	6.6
スポーツ活動	46.7	33.5
交流活動	17.7	18.1
まちづくり	20.7	20.6
震災後の復旧・復興	16.1	26.7
その他	2.4	2.6

③　地域活動に充てる時間はある（活動可能時間の状況等）

中学生，高校生の土日（休日）の生活には，学習や習い事等の時間も含まれるが，全体的に部活動が占める割合が非常に高いことから，アンケート調査では，部活動の活動日数を取り上げている。

子どもの部活動の週当たりの活動日数は，6日～7日である割合が中学生では約75％（6日59.2%，7日15.1%）高校生では約48％（6日36.3%，7日11.8%），ジュニア・リーダーでは約53％（6日40.2%，7日12.4%）となっており，特に中学生の週当たりの部活動の日数の割合が多くなっている。**(図表5)**

一方，休日の1日当たりの余暇時間の平均としては，「3時間以上」が中学生で約80％（3~5時間28.9%，5時間以上50.8%），高校生で約75％（3~5時間24.3%，5時間以上50.6%），ジュニア・リーダーで約76％（3~5時間25.2%，5時間以上50.4%）であり，大きな違いはない。**(図表6)**

中学生，高校生の生活では，確かに部活動が大きなウエイトを占めているが，休日の余暇時間については，ジュニア・リーダーと大きな差違はなく，ジュニア・リーダー以外の中学生，高校生でも地域活動に充てる時間の余地はあると推察される。

図表５　部活動の週当たりの活動日数

週当たりの活動日数	中学生（%）	高校生（%）	ジュニア・リーダー（%）
1日	2.4	10.4	2.1
2日	1.3	10.2	6.2
3日	2.3	7.8	5.2
4日	2.7	5.4	5.2
5日	16.9	18.1	28.9
6日	59.2	36.3	40.2
7日	15.1	11.8	12.4

図表６　休日の余暇時間の平均

休日の余暇時間	中学生（%）	高校生（%）	ジュニア・リーダー（%）
0～1時間	1.6	1.6	3.7
1～2時間	4.4	7.4	6.7
2～3時間	14.2	16.1	14.1
3～5時間	28.9	24.3	25.2
5時間以上	50.8	50.6	50.4

（2）子どもを取り巻く大人の意識

① 保護者の意識

保護者全体の5.2%が，自分の子どもが地域活動に「よく参加している」と回答し，26.8%が「ときどき参加している」と回答している。参加の効果としては，「本人の成長になる」と回答している保護者が多い。(図表7・8)

また，現在地域活動にほとんど参加していない子どもの保護者では，18.6%が「今後は参加させたい」と回答しており，61.6%が「活動によっては参加させたい」と回答している。その主な理由としては，「本人の成長になる」「人間関係が広がる」を挙げている保護者が多い。また，「地域のためになる」という地域貢献の観点については，15.2%と他に比べると高くはない。(図表9・10)

保護者が参加させたい地域活動では，「地域の祭り・伝統芸能文化」の割合が約半数を占めている。(図表11)

全体的な傾向としては，保護者は，子どもの地域活動への参加は子どもの成長や地域に目を向ける機会につながるよいことと評価し，機会があれば参加させたいという意識を持っている。

図表7　子どもの地域活動に関する保護者の捉え

子どもの参加状況	割合（%）
よく参加している	5.2
ときどき参加している	26.9
ほとんど参加していない	68.6

図表8　地域活動への参加の効果（複数選択）

参加の効果	割合（%）
本人の成長になる	58.9
将来の役に立つ	44.8
地域のためになる	44.8
人間関係が広がる	43.8

図表9　地域活動に子どもが不参加の保護者の今後の意向

保護者の意向	割合（%）
参加させたい	18.6
活動によって参加させたい	61.6
特に参加させたいとは思わない	19.8

図表10 子どもが地域活動に不参加の保護者が今後参加させたい理由（複数選択）

参加させたい理由	割合（%）
本人の成長になる	25.6
将来の役に立つ	18.4
地域のためになる	15.2
人間関係が広がる	21.2
家族が参加して良かった	2.9

図表11 今後参加させたい地域活動（複数選択）

参加させたい地域活動	割合（%）
地域の祭り・伝統芸能文化	48.7
地域の清掃・緑化活動	32.6
防災訓練	34.2
スポーツ活動	35.0

② 教員の意識

教員の約 92％（たいへん良いことだ 56.1%，良いことだが参加は難しい事だ 36%）が，子どもの地域活動への参加はよいことと回答している。(図表 12)

特に，子どもが地域活動に参加するための条件については，情報提供の在り方や部活動の在り方，学校と地域家庭の連携などの必要性を感じている教員が多い。(自由記述)

図表 12　子どもの地域参加をどう思うか

子どもの参加に関する考え	割合(%)
たいへん良いことだ	56.1
良いことだが，参加は難しい事だ	36.0
良いか必要ないかの判断は難しい	7.1
必要ない	0.4

自由記述：「子どもが地域活動に参加できるための条件とは」

- 早期，小まめな情報提供によって，部活動の日程調整や子どもへの周知が可能になる。
- 長期休業や部活動のオフシーズンの活用によって，部活動単位の地域活動が可能になる。
- まず経験させる事が大切なので，強制的な働きかけも必要。経験すればその意義や価値を感じ取り，主体性が生まれる。
- 学校と地域，行政が連携して，計画性を持って取り組み，そこで家庭への周知を図り，理解を得る。
- 部活動の在り方を広域的（市町村レベルや県全体レベル）に検討し，子どもが地域活動に取り組める環境を整える。

③ 行政・地域住民・ＮＰＯ等の意識

行政職員，地域住民，NPO 等の約 80％は，今後も子どもを地域活動に参加させたいと回答している。参加させたい活動内容としては，「地域の祭り，伝統芸能文化」や「防災訓練」をはじめ，幅広い取組を期待している。(図表 13・14)

また，子どもが地域で活動しやすい環境を整備する条件に関する自由記述では，子どもの意見を尊重すること，学校と地域との連携や情報の共有，家庭の地域への関わり方，部活動の在り方の検討などの必要性を感じている。

図表 13　子どもの地域参加について

参加させたい	79.9
現状で十分	20.1

図表 14　子どもに参加させたい活動 (複数選択)

参加させたい活動	割合（%）
地域の祭り・伝統文化	74.0
地域の清掃・緑化活動	50.9
防災訓練	63.2
スポーツ活動	57.6
交流活動	46.8
まちづくり	52.8
震災後の復旧・復興	24.2

自由記述：「子どもが地域活動に参加できるための条件とは」

- 子どもの頃から地域活動に参加することや，地域にどんな思いを持っているか聞く機会を設定する。
- 学校の行事や部活動など教育活動の一貫として地域活動を組み込み，まず何らかの形で参加させてみる。
- 早めに情報提供し，学校や保護者の理解を得るとともに，子どもへの周知に時間をかける。
- 家族が地域を構成する最小単位であることを地域内で共有し，親が地域活動に参加したり，小さい頃から親と地域で活動することが意識化につながる。
- 学校と地域が連携し，日頃から連絡を密にとって，地域のことを考えていくことが子どもへの共通した働きかけにつながる。

2　子どもを地域活動に向かわせるもの

地域活動に参加した理由では，中学生，高校生ともに「興味があった」が高く，次に「友達の誘い」「親の勧め」と続いている。また，中学生は「学校の行事として参加」，高校生は「部活動として参加」の割合も高い。(図表 15)

図表 15　中高生になって地域活動に参加した理由（複数選択）

参加した理由	中学生（%）	高校生（%）
興味があった	29.2	36.3
親の勧め	17.1	17.0
友達の誘い	23.1	24.2
学校の先生の勧め	13.5	9.3
地域の人の勧め	6.9	8.2
学校の行事として参加	25.3	9.3
部活動として参加	10.0	14.8
生徒会活動として参加	3.9	4.4
ジュニア・リーダーとして	3.3	7.1
ボーイスカウト・ガールスカウトとして	0.4	0.5
家族が参加	7.1	8.2
特に理由はない	16.7	8.2
その他	9.0	5.5

聴取調査やアンケート調査の自由記述によると，学校単位で地域活動に関わることはきっかけとして大変有効であり，多くの仲間との一体感や達成感を共有することが，次の活動への意欲につながっている。また，部活動や生徒会などで共に過ごす時間帯が共通している友達同士で地域活動に取り組むことをきっかけに，子どもが地域活動への興味関心を高めていることが分かる。(聴取・自由記述)

さらに，家族で地域活動に参加した経験や地域活動・ボランティア活動などに関する情報に常日頃から触れていることが，地域活動への関心や意欲の高まりにつながっている事例も見られた。幼少期や学童期からの経験によって，子どもの地域に対する意識の醸成が図られていることが分かる。(聴取・自由記述)

また，多くの中学生や高校生が，震災を契機に地域を見つめ直し，震災後に自分たちができることは何かについて考え，意欲的に取り組んだことがうかがえた。(聴取・自由記述)

聴取内容「地域活動への参加のきっかけは何か」・自由記述「将来どんな地域にしていきたいか」

- 地域活動には，「学校行事で参加した」「部活動で参加した」「生徒会として参加した」。
- 幼少の頃から家族と一緒に地域活動に参加していた。家族でボランティア活動をしていた。家族とニュースで地域活動を話題にしていた。
- 活動のきっかけは，震災後に自分たちに何かできる事はないか，仮設住宅の住民に対して何かできないか考えたから。
- 自分たちの地域を，早く震災前に戻し，みんなが安心して暮らせる地域にしたい。

3　子どもの地域活動への参加・参画を進めるためには

（1）地域活動に参加する意義を伝える

・中学生，高校生ともに現在不参加の理由として，「興味がない」の割合が高く，現在参加していない子どもの保護者の理由としても，「興味がない」が子どもとほぼ同じ割合である。（図表 16）

聴取調査では，地域活動に参加した子どもの多くが，自分たちが地域活動に取り組んで得られた成果等について，多くの人に伝え，活動の輪を広げたいという思いを持っている。その思いを生かしながら，多くの子どもや保護者に地域活動に対する興味を持たせるとともに，学校には，子どもの地域活動を適正に評価し，子どもが地域活動に参加することの意義をより多くの子どもや保護者に伝える工夫が求められる。

（2）地域活動に関する情報提供の仕方を工夫する

・多くの中学生や高校生が，地域活動への不参加理由として「活動情報がない」ことを挙げている。（図表 16）

・地域活動に不参加の子どもの保護者も，「活動情報がない」ことを理由に挙げている。（図表 16）

地域活動に関する情報が子どもや保護者に提供されることによって，地域活動への関心や参加の意欲も高まるのではないかと考えられる。

例えば，情報提供の時期，効果的な情報共有の場の設定や情報伝達の方法など，情報提供の仕方を地域や学校で検討し，工夫することが求められる。

（3）地域活動の日程・時間帯の設定を工夫する

・地域活動に参加していない理由として，中学生では「日程，時間帯が合わない」が一番多く，高校生でも２番目に多い。（図表 16）

・保護者の子どもが参加しない理由でも，「日程，時間帯が合わない」が一番多くなっている。（図表 16）

地域活動の日程や時間帯を工夫することによって，中学生や高校生が参加しやすくなる。例えば，学校等とも連絡を取り合い，参加可能な時間帯を把握し，複数の活動日や活動時間帯から選択できるようにしたり，多様な活動プログラムを準備し，選択の幅を広げるなど，子どもの実態に合わせて工夫していく必要がある。

図表 16　現在地域活動に不参加の理由（複数選択）

現在不参加の理由	中学生（%）	高校生(%)	保護者（%）
興味がない	37.3	29.7	30.6
日程・時間帯が合わない	47.1	43.8	53.2
参加したい活動がない	23.7	20.1	26.7
活動情報がない	34.1	49.8	34.9
一人ではいやだから	19.2	12.8	16.7
その他	6.2	3.6	6.8

（4）部活動の在り方を考える

・県教育委員会の調査では，平成２７年度に土日とも活動している割合は，文化部よりも運動部が高く，中学校の運動部の 8.9%（187 部/2109 部），高校の運動部の 44.2%（482 部/1090 部）となっている。（図表 17）
・地域住民が考える子どもの地域活動への不参加の理由では，「部活で忙しい」や「勉強で忙しい」の割合が高い。（図表 18）
・今後も地域活動に参加しない理由では，中学生，高校生ともに「休日は休みたい」の割合が一番高く，保護者についても「休日は休ませたい」が高い割合になっている。（図表 19）

子どもの生活の多忙化の要因は様々であるが，その解消のためには，放課後や休日の過ごし方で大きなウエイトを占めている部活動を含めた生活の在り方の検討が求められる。

特に，部活動に限らず地域活動などの有益な活動に，子どもがより参加しやすい環境を整備する観点から，放課後や休日の過ごし方に関する学校の関わり方について検討することが重要になる。

一方で，部活動単位で地域活動に参加している子どもも多い。部活動単位の参加は，子どもが日頃一緒に活動している仲間と参加できるため，参加への抵抗感が少なくなるとともに，活動による成就感の共有などが期待できる。

よって，今後の部活動の在り方や方向性については，子どもの地域活動への参加を進める観点からも検討していくことが必要になる。

図表 17　土曜日・日曜日の活動状況

	中学校文化部		中学校運動部		高校文化部		高校運動部	
	部数	割合	部数	割合	部数	割合	部数	割合
全体	468	100.0%	2109	100.0%	768	100.0%	1090	100.0%
土・日とも活動	22	4.7%	187	8.9%	41	5.3%	482	44.2%
土・日とも休養	243	51.9%	36	1.7%	526	68.5%	28	2.5%
土曜日だけ活動	147	31.4%	1148	54.4%	140	18.2%	476	43.7%
日曜日だけ活動	2	0.4%	61	2.9%	9	1.2%	29	2.7%
その他	54	11.6%	677	32.1%	52	6.8%	75	6.9%

＜中学校・高等学校の部活動に関する調査　H27.9　宮城県教育庁スポーツ健康課まとめから＞

図表 18　子どもが地域活動に不参加の理由（複数選択）

参加しない理由	地域・行政・NPO（%）
興味がない	47.1
部活で忙しい	72.1
勉強で忙しい	32.4
活動情報がない	45.6
参加したい活動ではない	38.2
一人ではいや	39.7

図表 19　今後も地域活動に不参加の理由（複数選択）

今後も不参加の理由	中学生（%）	高校生（%）	今後も不参加の理由	保護者（%）
勉強したい	16.4	27.8	勉強させたい	16.2
休日は休みたい	74.1	51.9	休日は休ませたい	28.4
参加する意味がない	17.4	9.4	参加する意味がない	6.9
忙しくて時間がない	32.0	39.6	忙しくなる	23.0
ほかにやりたいことがある	46.6	42.8	参加させたい活動がない	46.1

第Ⅲ章　具体的な方向性
―世代を超えたかかわりをもつ―

ここでは，聴取調査の事例を踏まえ，子どもが地域活動により参加・参画しやすくなるためのしくみづくりの方向性について述べる。

この方向性は，子どもが地域活動に関わるきっかけや仕掛け，活動中の働きかけやサポートなどから，世代を超えてかかわりをもつためのしくみについて，手順を段階ごとに整理し，まとめたものである。さらに，地域活動に参加した子どもたちの声を基に，かかわりを深めるための手立てについても示している。

また，取組を進めることによって次のような成果が期待できることも明らかになっている。

○子どもの地域活動への参加・参画の推進　○子どもの変容　○世代の交流
○地域のつながり　○地域の活性化　○次世代の育成

1　世代を超えたかかわりをもつためのしくみ

子どもが地域活動にかかわるきっかけや仕掛け方に沿って，主に３つの形に分けた。

＜３つのしくみと手順＞

		手順	事例	ページ
しくみ1	**『組織づくりから入ろう』** ・「大人がつながること」を起点として，子ども・若者を取り込み，活動を展開していく形	① 大人の連携 ② 若者・子どもの取り込み ③ 子どもの活動の支援 ④ 活動の評価 ⑤ 地域への啓発	・ＮＰＯ法人『FOR YOU にこにこの家』 東四郎丸児童館・「チーム東中田っ子」	12・13
しくみ2	**『活動の場を学校から地域に広げよう』** ・「学校から地域に子どもを出すこと」を起点として，子どもが考え，活動を広げていく形	① 学校から地域に発信 ② まず活動 ③ 地域・学校・家庭による活動の評価 ④ 子どもの主体性の活用 ⑤ 地域と学校の連携強化	・宮城県佐沼高等学校 ・仙台市立八木山中学校 ・宮城県亘理高等学校	14・15
しくみ3	**『地域の課題（テーマ）を解決しよう』** ・「学校に地域課題やテーマを提示すること」を起点として，学校が子どもの地域活動を保障していく形	① 地域課題の提示 ② 学校の受入れ体制整備 ③ 共に活動 ④ 活動の評価と情報の共有 ⑤ 課題解決の推進	・村田町地域産業推進課「蔵の町むらた　布袋まつり」 ・仙台八木山防災連絡会「八木山シンポジュウム」 ・登米市社会福祉協議会「Ｊボラ体験隊」	16・17

※　「世代を超えたかかわりをもつ」ための流れはチャート図で表し，子どもから聴き取った声を子どもの変容として取り上げ，事例については主なポイントと学校や行政等の関わり方を中心にまとめている。

○しくみ１「組織づくりから入ろう」

段階	手順・活動例	ポイント
大人がつながる	**地域の大人が関わり合う機会の設定** ・行政や町内会からで声がけしてスタートする形が多い ・特にテーマを決めず，地域に関する意見を語り合う。 ・親睦や交流を目的として回数を重ねる	・キーパーソンを地域内で見つけましょう。 ・大学生にも声をかけてみましょう。 ・NPO を活用して全体のコーディネーターに据えてみましょう。
	地域課題の明確化 ・地域の課題や地域づくりにつながる事業についてまとめる。 ・地域資源の洗い出しと課題解決の方向性を定める。	・地域課題の中から，幅広い世代がかかわり合えることから始めましょう。 ・解決方法に合わせた地域資源を見付けましょう。
子どもを取り込む	**組織化に向けた取組** ・構成員を固める。 ・キーパーソン中心に協力者，協力団体等のネットワーク化を進める。 ・若者の団体や学校，ジュニア・リーダーを組織内に位置付ける。	・話し合いの日程を土日に設定してみましょう。 ・行政等の主導から，キーパーソン中心の組織に変えてみましょう。 ・公民館等に組織の活動場所を確保しましょう。 ・住民の目に止まるような情報提供の場を設定しましょう。
	課題解決に向けた，学校への働きかけ ・活動の意味付けを説明し理解を得る。 ・教育課程とのすり合わせの機会を持つ。 ・学校の窓口を明確にし，情報共有の道筋を付ける。	・学校では，１１月頃には次年度の活動が決まるので，計画的に学校と連携しましょう。 ・学校から保護者にも情報を流してもらいましょう。 ・校長先生をはじめ，教員の理解を得るために，適時資料などを提示していきましょう。
活動を支える	**実践と振り返り** ・子どもに任せる部分を多くし，大人は見守る。 ・子どもと大人がともに同じように活動する。 ・子どもと話し合いながら役割を明確にする。 ・活動後に振り返り（反省，感想）をする。	・活動の計画段階で子どもの意見を反映できる機会が持てると子どもの意欲と向上心が高まります。 ・活動中も何気ない子どもの声を拾って，子どもの考えや気持ちをつかみましょう。
評価し啓発する	**子どもの活動の評価** ・大人が褒め，励まし，感謝する。 ・他者にも見える形で評価する。	・大人の率直な声が子どもに響きます。 ・認められることで子どもが変容します。 ・地域のお便りや回覧板で子どもの活躍を紹介すると，子どもの達成感が高まります。 ・学校からもお便りで紹介することも有効です。
	活動の改善と継続性の検討 ・活動の成果と反省点を明確にする。 ・継続性を高めるための方策を考える。	・子どもの声を今後の活動に反映させましょう。 ・企画段階で子どもが参加できる体制にしましょう。 ・PTA や地域の団体とのネットワーク化を意識して，活動の幅を拡げられるようにしましょう。

期待される成果

○世代を超えて関わり続けるための地域の母体が整う。
○子どもも地域の担い手の一員として自覚が高まる。
○子どもの自尊心が育つとともに，地域における子どもの存在感が高まる。

【事例】１仙台市東中田地区の子育て環境づくり

事　例　の　概　要

１　ＮＰＯ法人「ＦＯＲ　ＹＯＵ　にこにこの家」：
　　東四郎丸児童館　「チーム東中田っ子」

２　活動の流れ

①　きっかけ

・東中田地域を子育てしやすい環境にするため中学校区の地域ネットワーク作りを進めたいという館長の思い
・平成１６年にほっとネット IN 東中田立ち上げ
　地域の２０団体によるネットワーク
・平成１８年に子どもの地域ボランティア団体「チーム東中田っ子」を立ち上げ
・児童館を利用している小中学生に声がけしてスタート→小中学校に活動の意義説明→活動の定着
・児童館が日常的な活動場所であり，情報収集，発信の拠点
・中学校卒業後の高校生も継続的に参加
・小中学生＋高校生による自主企画会議
　　＜企画例＞：高校生のマジックショー
　　中学校科学部のサイエンスショー
　　地域防災マップづくり
　　星空コンサート　　など
・事業展開には，「地域まるごと応援隊」が協力
・広報誌による地域，家庭，学校への周知，啓発
・館長が地域のスーパーバイザー→学校との連携

②　学校の役割

・チラシの配布による広報
・定期的な話し合いの場の確保→子どもの支援の在り方の共有

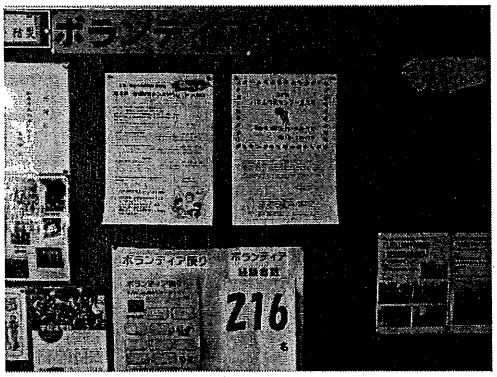
③　行政・企業との連携

・日常的なネットワークの構築が重要
・仙台市による施設使用料の免除，地域の企業の活性化につなげるための工夫

子　ど　も　の　声

・積極的に行動することが苦手だったが，チーム東中田っ子として活動することで，段々と積極的に行動できるようになった。
・東日本大震災を体験した私たちが，「防災・減災ワーク」を通して震災を風化させず，次に起きたときのために，みんなに伝えていこうと思った。
・学校に募集がきて，夏休み中に小学生の勉強を教えるボランティアに友達と参加した。教えた子どものお母さんにお礼を言われてうれしかった。
・地域の祭りで部活の演奏をした。地域の人に聴いてもらえると思うとがんばれるし，やりがいがある。
・クラスごとに地域内の清掃活動に参加した。喜んでもらえると，人のためになるのでやって良かったと思う。
・親といっしょに地区清掃に参加した。一人では行けないけど，友達といっしょだったりすると，遊び感覚で参加できるからよい。

しくみ１事例１（P13）
仙台市東四郎丸児童館「チーム東中田っ子」
自主企画会議



しくみ２　事例２（P15）
「仙台市立八木山中学校」
ボランティア活動の情報や活動状況の紹介

しくみ２　事例３（P15）
「宮城県亘理高等学校」
ハートウォームキャンペーン：フラワー作戦
（交通安全の呼びかけと花の配布）

しくみ３　事例１（P17）
「蔵の町むらた　布袋まつり」すずめ踊り

○しくみ2「活動の場を学校から地域へ広げよう」

段階	手順・活動例	ポイント
地域に発信する	**子どもを地域に関わらせたいという願いの発信** ・地域活動，地域貢献の観点から学校が地域に働き掛ける。 ・PTA と連携して学校の地域での役割を考える。 ・地域活動を教育課程やカリキュラムの一部に位置付ける。 ・学校職員の意見と理解の共有の場を設定する。	・子どもが地域でどのような活動をしたいかなどを話し合う機会を設定しましょう。 ・学校の行事や総合的な学習に組み込むことで，活動が定着します。
まず活動する	**情報収集・整理，窓口の明確化** ・地域や行政から情報を収集し整理する。 ・学校の窓口となる担当職員を明確にする。 ・子どもや家庭への情報提供を定期的に行う。	・職員室前など目に付くところに情報提供の場があると周知が図れます。 ・担当窓口が外部に分かりやすいと外部からの情報量が増えます。 ・家庭の支えが子どもの活動の土台になることから活動の意義を家庭に伝えましょう。
	サポート団体との連携 ・公民館や行政，各種団体などとの連携により活動の場を確保する。 ・地域の核となる人材とネットワークを深める。 ・定期的に情報共有の場を持つ。	・地域貢献活動については，社会福祉協議会の情報が有効です。 ・公民館，市民センターは土日も活用できます。 ・地域行事の情報は行政との連携が大切です。 ・福祉部局やまちづくり部局ともネットワークを広げましょう。
活動を奨励する	**地域活動への参加・参画** 個人で／部活動単位で／生徒会として／学年・学級単位で／学校全体で	・小集団による活動で，活動場所や日程の調整が容易になります。 ・子どもに活動内容を考えさせると子どもは主体性を持って取り組みます。 ・部活動単位の場合は，オフシーズンが有効です。 ・生徒会単位の場合は，全校活動への発展が期待できます。 ・地域貢献，ボランティア活動から入ると子どもも地域に出やすくなります。
主体性を生かす	**活動の評価・周知啓発** ・学校内に活動の様子を掲示し，情報発信する。 ・学校便り，HP 等で家庭や地域に情報発信する。 ・子どもの活動を広げる機会を設定する。 例：子どもから子どもへ伝える場 子どもから地域に伝える場 ・子どもが振り返る機会を設定する。 ・子どもから地域に向けて提案するアイデアを募集する。 ・学校関係職員間で情報，評価を共有する。	・大人が活動を認め，褒め，励まし，感謝することが一番の評価です。 ・活動した子どもは活動のよさを伝えたい気持ちが強いです。 ・ジュニア・リーダーや個人の取組も学校で把握し，地域活動の全体像をつかんでおきましょう。 ・子どもの活動に対するアイデアを地域に発信することが次につながります。 ・窓口担当と生徒会担当等が，日頃から情報を共有している事が大切です。
連携を強化する	**学校と地域の連携の強化** ・子どもの活動を広げる話し合いの場を持つ。 ・活動の継続性を高めるために，ネットワークを広げる。	・地域の人と子どもが直接話し合える機会があると主体性が高まります。 ・地域の声を学校と行政の両方で収集して，広報すると，新たな活動が見えてきます。 ・学校の担当者が地域の方等と情報共有しやすい立場にしておくことが大切です。

期待される成果

○学校と地域の連携が深まり，子どもを中心に協働して地域を考える気運が高まる。
○地域内で子どもの存在感，地域に対する力が認知され，地域の活性化につながる。
○子どもの成長により，家庭（保護者）の地域に対する意識が高まる。

【事例】1　佐沼高校の部活動単位による取組

【事例】2　八木山中学校のボランティア活動の取組

【事例】3　亘理高校の生徒会の取組

事　例　の　概　要

1　宮城県佐沼高等学校
2　活動の流れ
① きっかけ
・震災後，自分たちに何かできないかと考え始め，仮設住宅の住民に声をかけた。
・生徒が自分たちの活動を地域に役立てたいと，地域に情報発信
・地域貢献を良しとする校風
・地域の学校という意識の高まり
＜主な活動例＞　運動部の雪かき，餅つき，海岸清掃，お茶立て
② 学校の工夫
・部活のオフシーズンを活用
・ボランティア担当教諭の配置
・地域等へのボランティア情報の的確な発信
③ 成果
・地域の評価，住民の声で自信を付ける子どもたち→次を目指す
・地域と学校との連携強化による活動の拡大

1　仙台市立八木山中学校
2　活動の流れ
① きっかけ
・平成２２年に中学生を地域で活躍させたいという学校，PTA の願いから地域ボランティア活動を推進
・ビブスを付けて活動→認知度，評価の向上
・市民センターとの連携による情報の共有
・震災時に地域で活躍する子どもの姿→地域内の期待向上
活動例：地区防災訓練のサポート，小学校の放課後の学習サポート，祭りでの演奏会
② 学校の工夫
・ボランティア担当窓口の設置→各学年に１名担当教員配置
・掲示板「ボランティアコーナー」による活動情報の発信
③ 成果
・地域交流の活性化による拡大

1　宮城県亘理高等学校
2　活動の流れ
① きっかけ
・震災後，生徒会として地域の人を応援したいという気持ちを受けて，地域連携担当教員と子どもが話し合ってスタート
・「ハートウォームキャンペーン」活動例：「フラワー作戦」「クリーン作戦」「校外ボランティア作戦」
② 学校の工夫
・新聞，テレビ，学校便り，フェイスブックによる活動紹介，情報発信
・NPO との連携：校内リーダー研修会の講師
・小中学校との連携：出前授業
・「亘理町子どもサミット」への参加：リーダー性の育成
③ 成果
・家庭の理解の向上
・コミュニケーション力の向上

子　ど　も　の　声

・震災後，がれき撤去は無理でも音楽で心の面で支えられると思った。
・自分の高校だからできることを考えて，仮設住宅への訪問に取り組んでいる。
・仮設住宅が身近に有り，違和感なく自分の家族同様に接することができた。
・部活動単位は半強制的なため，休みづらい。しかし部活動単位ではないと情報が来ない。部活に入っていなければ経験できなかったことだ。
・地域の人に出身校が同じ人が多く，親近感を持ってもらえた。高校単位の良さだと思う。
・着物でお茶を点てたときに褒められたり，喜ばれたことがうれしかった。
・同じ地域だからやりたいという使命感を感じている。自分のためでもあり社会の役にも立つ。
・家族との会話が増え，挨拶を積極的にするようになった。地域の人が試合で応援してくれてうれしかった。

・地域等からの要請で，生徒の有志や部活動単位で参加している。
・ボランティアには小さい頃に家族でも参加していた。中学校では当たり前のことと感じている。
・「頼りになる」「ありがとう」などお礼の言葉を言われると達成感がある。
・高齢者の笑顔や子どもの楽しそうな様子、地域の人と知り合いになれることがよかった。
・人の役に立ったこと，一体感や達成感，交流する楽しさを感じた。中学生でも役立つことが分かった。
・自分の経験を生かして，将来自分が住む地域も八木山のようになるために働きかけるキーマンになりたい。
・地域への恩返しだと思っている。支えられて支えている感じ。
・地域が賑やかになる。人が増えれば活動が充実し，知識やノウハウが学べる。

・学校のリーダー研修会を機会に参加。
・中学生まで家族と地域活動に参加していた。
・人と関わることで，地域でも声をかけられ，子どもから慕われてうれしい。
・達成感と共に自分の住む町のよさを実感した。
・地域から認知され，地域活動を待っている人がいることがうれしい。
・自分の意見が言えるようになり，家族に褒められ，高齢者や子どもを気遣うようになった。自分の積極性と地域の人へのまなざしが変わった。
・コミュニケーションをとることが苦ではなくなった。地域活動を重ねることで自然と身に付いた気がする。
・今後地域の御輿の担ぎ手に参加してみたい。地域との交流が少ないので，交流できる場が必要だと思う。
・将来は人の役に立つ仕事に就き，地元に戻ってきたい。

○しくみ3「地域の課題（テーマ）を解決しよう」

段階	手順・活動例	ポイント
課題を投げかける	地域の課題を子どもとともに考えたいという思いの共有 ・地域の課題を地域側から学校に提案してともに考える。 ・地域活動の場を地域から提供する。 ・PTAが中心となって活動の場を拡げる。	・課題やテーマは地域の特色ある行事や防災，ボランティア活動など様々です。 ・活動は地域全体が関わるもので，子どもはその中で役割を持てるものがよいでしょう。 ・子どもが地域の一員であると感じることができる活動が大切です。 ・ジュニア・リーダーの活用の窓口は学校ではなく，教育委員会になります。
体制を整備する	学校内の受入体制の整備 ・活動の意義を職員で共有し，共通理解を図る。 ・学校としての方針や方向性を持つ。 ・学校の窓口となる担当職員を明確にする。 ・教育課程やカリキュラムの中での位置付けを明確にする。 ・保護者の理解を得るためにこまめに情報提供する。 ・子どもの関心が高まるように情報提供する。	・学校全体の活動には，時間を要するので，早めの連絡が必要です。 ・内容によって，学校の体制は変わります。どんな体制がよいか，連絡を密にしましょう。 ・学校内では，子どもによる活動の話し合いの場を設定できると，自主性が高まります。 ・志教育，キャリア教育の一環と捉えると，継続の方向性がはっきりしてきます。 ・学校から窓口担当を地域に伝えておくと連携がスムーズです。
共に活動する	子どもが活動の中で役割を果たす ・自分の役割を理解し，責任を果たす。 ・活動内容について大人と協力する。 ・活動を工夫して，改善できる場を持つ。 ・地域住民と関わる場面を設定する。 ・大人は子どもの意見を尊重する。	・活動内容を子どもが選択できる形も有効です。 ・小学校，中学校，高等学校，大学など，各世代が共に活動できる場も大切です。 ・地域住民には，子どもが参加することの意義を事前に周知しておくと，交流がスムーズに図れます。 ・参加の形態は，学校全体でも小集団でも，個人でも多様です。
評価し共有する	活動の評価・共有・周知 ・学校内に活動の様子を掲示し，校内に周知する。 ・学校便り，HP等で家庭，地域に情報発信する。 ・子どもが振り返る機会を設定する。 ・学校，地域，子どもが成果や反省点，今後の方向性を共有できる場を設定する。 ・地域団体，行政，住民は多様な形で子どもの活動を評価し，意欲を高める。 ・活動の成果が分かるように，広報等で地域内に情報提供する。	・大人が活動を認め，褒め，励まし，感謝することが一番の評価です。 ・活動に対する子どものアイデアを地域に発信することが次につながります。 ・広報や情報提供には，子どもの声や地域住民の声を掲載することで，活動の効果が伝わります。 ・保護者の励ましや支えが子どもの意欲の向上と達成感につながります。
活動を継続する	活動の日常化と継続化 ・活動の継続性を高めるために，地域内のネットワークを拡げる。 ・子どもの活動広がりが出るように，活動の場の提供の拡充を図る。	・地域の声や子どもの声を収集して，整理すると，新たな活動が見えてきます。 ・学校の担当者が地域等と情報共有しやすい立場にしておくことが大切です。 ・家庭内で，日頃から地域のことを話題にしたり，地域活動の意義を話し合っておくと，子どもの意識が高まります。 ・保護者が地域活動に参加する機会を設定することも大切です。

期待される成果

○地域課題を将来的に継続して考えていく仕組みが整う。
○世代間の交流が深まり，地域コミュニティの活性化が推進される。
○特色ある地域づくりの気運が高まる。

【事例】1　村田町の祭り活性化の取組

【事例】2　仙台市八木山地区の地域防災の取組

【事例】3　登米市の地域貢献活動推進の取組

事　例　の　概　要

1　村田町地域産業推進課
「蔵の町むらた　布袋まつり」
2　活動の流れ
① きっかけ
・村田第一中学校ＰＴＡ：祭りで中学生の活躍の場を作りたい。
・行政はまちの活性化につながる。
・中学生が参加するようになって２０年。
② 学校の関わり
・中学生を地域で活躍させたい。
→有志からスタート
→すずめ踊りをアレンジした踊りの考案と祭りへの提案
・総合的な学習としてカリキュラムに位置付け
・地域指導者の活用
・「布袋祭り委員会」を生徒会に位置付け
③ 行政の役割
・祭りの役割を幼稚園児から大学生までに割り当て，定着させる。
・各団体，学校と調整し，団体間の連携をコーディネートする。

1　仙台八木山防災連絡会
「八木山シンポジュウム」
2　活動の流れ
① きっかけ
・平成２１年に共助，防災の日常化，若者参加をキーワードに立ち上げ
・八木山中を中心に半径 1.6km 以内にある団体で構成
・若者部会に小中高大とその保護者が所属：中学校生徒会が参加
・メイン：１２月開催の八木山シンポジュウム
・定期的な会議の開催：八木山シンポジュウムの内容の協議
・世界防災会議に向けて
「防災ダック」：防災ゲームの考案「防災ダンス」：ダンスの考案
② 学校の関わり
・ 中学校１年生が「防災ダック」，「防災ダンス」を全員受講：学校の授業
・部活動単位や生徒会で幼稚園や小学校で「防災ダック」「防災ダンス」の出前指導

1　登米市社会福祉協議会
「Ｊボラ体験隊」
2　活動の流れ
① きっかけ
・平成１９年に従来の地域貢献機会の提供事業を「Ｊボラ体験隊」として組み替え
・夏休み中：市内の中高生対象
・事前研修会の開催
・子どもの意見を受け，複数の活動から自由に選択できる形に変更
・個人でも複数人でも参加可能
・日程に合わせて複数回でも参加可能
・広報誌による地域への活動の周知と啓発
・地域貢献担当職員の配置
・地域関係団体への協力依頼
・学校との連携：生徒の地域活動の広報と地域の声の集約発信
② 学校の関わり
・ちらしの配布
・ボランティア担当窓口の明確化
・活動情報の生徒への提供

子　ど　も　の　声

・小学生の頃から祭りを見ていて，中学生になったら，やるものと思っていた
・小学生の頃から太鼓の中学生に憧れていた。やりがいがある。
・練習から雰囲気が良く，２，３年生が１年生に教えるが，２，３年生は事前に互いに復習し合う。部活動以外で先輩後輩と関われて楽しい。
・すごいと言われて，拍手をもらえることがうれしい。
・町全体が盛り上がり，祭りを通して温かいものを感じられる。
・地域の人と関われることがうれしい。
・母親や妹が一緒に参加するので，家の中で祭りの話で盛り上がる。
・母親はボランティアの仕事をしているので，両親共に地域に関わる仕事をしている。
・陶器市や他の地域活動にも参加してできることをやっている。

・防災ダンスや防災ダックを幼稚園や小学校でやると，ありがとうと言われてうれしいし，やりがいや達成感がある。
・子どもが見ていると思うと頑張ることが出来る。
・子どもやお母さんが覚えてやってくれるとうれしい。お姉さんありがとうと声をかけられるとうれしい。
・共助につながる。改めてあいさつやコミュニケーションの大切さを感じている。大人になっても，困っている高齢者を助けられる人になりたい。
・地域の人と交流していると困ったときに顔と名前が分かることは助け合える。これは，シンポジュウムに参加して分かったこと。
・防災ダックをしていて，普段，自分ならどうするとか，自然災害のニュースを見たときに，自分ならと考えるようになった。

・家ではできないコミュニケーション。達成感があった。やる前は分からなかったが，やってみると気持ちがよかった。
・家族は自分がやりたいことを自分で決めなさいと言ってくれる。自分でやる分責任が伴うが，その分進路を考えるときにも役立つ。今後もボランティアを続けて，身近な人とも話題にしていきたい。
・家庭や地域における役割意識や地域貢献できる自覚が芽生えた。

しくみ３　事例３（P17）
「Ｊボラ体験隊」保育所体験

2　かかわりを深めるために（子どもの声を受けて）

（1）子どもの思いを伝える機会や場をつくる

子どもは，地域活動を通して学んだ意義や価値を多くの友達や大人に伝えたいと思っている。また，もっと多くの人が地域活動に参加することも期待している。特に，同世代の子どもからの地域活動への参加に対する働きかけは，これまで地域活動に関心が薄かった子どもに対する参加のきっかけになる。地域活動の成果や子どもの思いを伝える機会や場をつくることで，子どもの地域活動はより広がっていく。

《思いを伝える機会や場》

○県の取組
・全県的な周知啓発を目的とした，若者による会議やフォーラムの開催など，同世代が集う場，異世代が集う場を設定する。
○市町村や地域の取組
・広報誌等で地域に情報提供し，周知，啓発する
・小学校，中学校，高校，大学や地域の青年団体等が情報を共有し，地域について話し合える機会を設定する。
○学校での取組
・活動状況を地域，保護者へのお便りやホームページ，マスコミへの情報提供等によって積極的に情報発信する。
・校内では，活動の様子を掲示したり，映像で流すなどの周知を工夫する。

【子どもの声】

・参画の輪を広げる周知，広報の難しさがある。一度でいいから強制的に参加するとよいのではないか。
・事後報告する機会が無い。活動をやりっ放しではなく，自ら内容や成果を確認する場があるとよい。
・参加体験を他の人に伝える場があるとよい。
・自分の体験前後の変化など感じたことを伝えられるとよい。
・活動報告カードで様子を周知したり，動画で流したりするとよいと思う。
・「ボランティアはいいよ」と言うだけではなく，「一緒にやろう」と誘って，活動のきっかけをつくることが大切。
・地域の清掃は，異年齢の活動なのに，同世代だけで集まっていることが残念。
・学校の便りに活動紹介が載っていると興味を持ってもらえる。

（2）子どもとパートナーシップをむすぶ

子どもは，自分の住む地域をよりよくしたいという願いや期待を持っており，その具現化のためには，大人の力が必要になる。大人と一緒に話し合うことで，子どもは自分たちができる事を確認し，アイデアや知恵を出し，また，大人と地域に対する思いを大人と共有することで，新たな地域活動へとつながっていく。

《パートナーシップの形》

・子どもを取り巻く大人は，子どもの意見を地域の担い手の意見として取り上げ，地域に必要な原動力とする。
・大人と子どもが話し合う場の設定については，子どもの生活時間帯を考慮し，一般的な実行委員会形式に加え，学校と連携して生徒会等に課題を投げかけ，学校生活の中で話し合いの時間を確保する方法も活用する。
・実行委員会の設置の際は，基本的に企画，運営を子どもに任せ，大人が適切な助言や方向性の修正をしていく方法も活用する。
・子どもを支える行政関係者や学校関係者，地域住民，NPO 等の大人は，キーパーソン（コーディネーター）として，子どもと十分にコミュニケーションをとり，手を携えていくことが活動の継続につながる。

【子どもの声】

・始めから内容を企画して，地域や行政に持ち込む形も面白いのではと思う。
・各イベントで「中学生の考えるコーナー」を設定して自主企画をする。
・「〇〇の手伝いします」と告知コーナーを校外に向けてアピールする。
・地域のいろんな大人と関わり合うことはやってみないと分からないので，きっかけが大切になる。
・地域活動の機会があれば，その楽しさやよさが分かる。その環境が大切になる。
・地域活動を特別なものと意識したことはない。強制されず，自分の意思が尊重され自然体に関われる環境がよい。
・参加して得た楽しさや達成感は，高校生や大人になっても参加するきっかけになったと思う。
・指示されてやる活動よりも，自分たちで主体的にやってみたい。その方がやりがいがあるし，喜んでもらえると思う。

（3）ジュニア・リーダーとのつながりを大切にする

ジュニア・リーダーは，学校の生徒会と同様に，話し合いのスキルを持ち，日常的に地域活動にかかわっている組織である。彼らの「地域を活性化させたい」，「自分たちに任せて欲しい」という願いや意欲を生かすとともに，より実践力のあるジュニア・リーダーに育成するために，地域のリーダーとして期待し，地域活動の企画運営を任せていくことが必要である。

《ジュニア・リーダーの活用》

〇県の取組
・ジュニア・リーダーは，小学生から大学生，青年層まで世代を超えた活動が容易であり，中高生として中心的な活動を終えた後も，人間関係が持続できる力を持っている。その人材を地域で生かし，地域づくり，次世代育成のキーパーソンとして育てていくために研修を充実させるなどの取組を進める。
〇市町村や地域の取組
・地域活動の企画・計画段階からジュニア・リーダーの意見を反映させ，活動全体をジュニア・リーダーに任せる。
〇学校の取組
・ジュニア・リーダーの持つ地域活動のノウハウを生かした校内活動等を検討する。

【ジュニア・リーダーの声】

・子どもが積極的にまちづくりにかかわりを持とうと思い，子どもと高齢者が団結できる地域づくりがしたい。
・自分たちで計画して活動する機会があるとよい。
・ジュニア・リーダーが活用される機会が増えるとよい。
・ジュニア・リーダーなど中高生が活動できる場を増やしてほしい。
・まず自分たちでやらせて欲しい。何にでも口を出さないで，見守ってほしい。
・子ども会などでも，いろんなボランティア活動でも依頼があれば活動する。その際，大人と対等の立場なのだということを考えてほしい。
・活動にやりがいを感じている，ジュニア・リーダーの意義を学校や友達に知ってほしい。
・ジュニア・リーダーの認知度が低い。
・ジュニア・リーダーの活動と学校の行事が重なったときに，学校が理解してくれることはうれしい。

（4）子どもと地域をつなぐ

子どもは，地域活動に参加することで，大人の姿から学び，地域における大人の役割を意識する。地域には，子どもたちの成長に大きな影響を与える大人がたくさん存在しており，より多くの大人と関わることで，子ども自身にとって，地域活動に取り組む意義が明確になる。

《地域とつなぐ》

○地域の大人の取組
・子どもに関わる行政職員や学校関係者，地域住民はすべて，子どもと地域活動をつなぐコーディネーターになり得る。さらに，その中で中心となるキーパーソンが大人同士をつなぎ，子どもの活動機会を拡大していく。
○市町村の取組
・さまざまな地域活動を通して，コーディネーターの質を高めるためにサポートするとともに，キーパーソンとなる人材を探し出したり，地域活動に参加している大人がキーパーソンとなるように支え育てていく。
・将来的にキーパーソンとなる可能性を持つ子どもにできるだけ多様な地域活動と関わりを持たせ，経験を積み重ねる機会を保障する。
○学校の取組
・子どもが地域活動に参加・参画しやすいように窓口となる担当者を明確にするとともに，子どもの地域活動を適切に評価し，職員全体が活動の継続に向けて支えていく。

【子どもの声】

・自分の地域活動の経験を生かし，将来自分が住む地域もよい地域になるように働きかけるキーマンになりたい。
・まずあいさつを自分から。大人になっても自分からあいさつができる人間になりたい。
・同じ地域だからやりたいという使命感を感じている。自分のためでもあり，社会の役にも立つ。
・将来は「地域政策」について大学で学びたいと考えている。自分にも地域のために何かできることがあるのではないかと思ったから。

（5）子どもの背中を押してあげる

親の地域活動への参加の様子から地域活動の意義を見いだしたり，幼少期や小学生の時期に地域活動へ参加した経験が，子どもの参加のきっかけのひとつとなっているなど，家族で地域活動やボランティア活動に参加することの影響は大きい。

また，子どもの活動を褒めたり，認めていく家族の対応が，子どもに自信を持たせ，安心して地域活動に参加できる支えとなっている。

《背中を押す》

○家庭の在り方
・家庭は，子どもにとって，一番身近な地域活動の基礎を育む場であり，地域活動の意義を伝えられる場であり，地域活動に向かう原動力を培う場である。
・子どもたちが地域で活動することによって，家庭が地域とつながり，新たなコミュニケーションの広がりが期待できる。
・親が地域の一員としての自覚を高め，日常的に地域活動に目を向け，地域と日頃から関わり合い，コミュニティとして機能することが，子どもの地域活動を推進していく大きな要因となる。
○市町村や地域の取組
・各家庭（家族）が地域と関わる機会を増やすとともに，親や家族が地域に出て行きやすい環境づくりを進める。

【子どもの声】

- 小さい頃から，親と一緒に家族でボランティア活動に参加していたので，気付いたらボランティアに参加していたという感じ。
- 父の仕事ぶりや生活を見ていて，どんな人とも話せるようになれば，自分のためになると思い，高校生になって地域活動に参加した。
- 学校に入る前から，地域の行事などには家族と参加していた。
- 地域活動を始めてから，家族に褒められることが多くなった。
- 自分たちの活動が，町の広報やテレビの報道で取り上げてもらうと家族の話題になる。
- 親には自分の活動を理解してもらっているので，励まして送り出してもらっている。

【親の声】

- 地域と学校が連携している姿を見せたり，親が子どもたちのために頑張っている様子を見せることが，子どもの成長に役立つ。
- 中学生，高校生の時期は，親の言葉よりも地域の人の声がけの方が受け入れやすい傾向もある。できるだけ，地域活動に関わる場をつくっていくことが大切。
- 子ども時代にいろいろな経験値をもつ大人と接する機会があると，いずれ地域のよい大人や親になっていくと思う。

※　ここに取り上げた「子どもの声」「ジュニア・リーダーの声」「親の声」は子どもが地域活動に参加・参画している事例の聴取調査によって，聴き取った声である。

【参考資料】

※　意見書作成に当たり，実施した調査関係等の関連資料については，宮城県教育庁生涯学習課のホームページに掲載しているので，御活用願いたい。

1　調査関係

①アンケート調査用紙

（中学生，高校生，ジュニア・リーダー，保護者，学校，地域）

②調査集計結果の概要

③聴取調査の概要

＜掲載場所＞

http://www.pref.miyagi.jp/site/syogaisingikai/syakyouinmain33.html

2　みやぎの協働教育に係る懇話会意見書

＜掲載場所＞

http://www.pref.miyagi.jp/site/kyodo/h27kensyukai.html

審議の経過

第１回会議　平成２６年　５月２６日（月）（宮城県行政庁舎）

・委嘱状交付
・第３３次テーマについて（今日的課題についての討論）

第２回会議　平成２６年　７月２８日（月）（宮城県行政庁舎）

・第３３次テーマの方向性について（グループ討議による焦点化）

第３回会議　平成２６年１０月２７日（月）（宮城県行政庁舎）

・第３３次テーマの設定について
・テーマに迫る方策について
（子どもに関するアンケート調査と聴取調査の必要性について）

第４回会議　平成２６年１２月２５日（木）（宮城県自治会館）

・第３３次テーマの決定
「子どもの参画が地域・学校・家庭をつなぐ-世代を超えてかかわり合えるしくみづくり-」
・テーマに迫る具体的な視点と方法について
（アンケート調査の調査対象及び具体的な設問内容について）
（聴取調査の内容について）

第５回会議　平成２７年　２月　４日（水）（宮城県自治会館）

・意見書に関わるアンケート調査の調査項目の審議（グループ討議による）
・聴取調査の実施に向けた協議（アンケート調査との関連性，対象とする事例内容）
・今後の審議計画について

意見書に関わるアンケート調査の実施

対　　象	中学校６校の１・２年生及びその保護者 高等学校４校の２年生及びその保護者 対象学校の教職員，対象学校所在地の地域住民・行政職員・NPO ジュニア・リーダー６団体
調査期間	平成２７年３月１６日～４月１７日
調査内容	①子どもの地域活動に対する意識・現状 ②大人の子どもの地域活動への参加・参画に関する意識

第６回会議　平成２７年　６月　１日（月）（宮城県自治会館）

・アンケート調査結果の考察
・テーマの論点の整理（聴取調査に向けて）

第７回会議　平成２７年　７月２９日（水）（宮城県行政庁舎）

・テーマの論点の整理
・聴取調査の実施内容の協議（聴取場所，聴取内容）

現地聴き取り調査の実施

◇第１回現地聴き取り調査
　９月　７日（月）（村田町地域産業推進課，村田町立村田第一中学校）　参加委員３名
◇第２回現地聴き取り調査
　９月　８日（火）（NPO「FOR YOU にこにこの家」，仙台市立袋原中学校）参加委員３名
◇第３回現地聴き取り調査
　９月　９日（水）（登米市社会福祉協議会，宮城県佐沼高等学校）　参加委員４名
◇第４回現地聴き取り調査
　９月１５日（火）（仙台市八木山市民センター，仙台市立八木山中学校）　参加委員３名
◇第５回現地聴き取り調査
　１０月　５日（月）（宮城県亘理高等学校）　参加委員３名

第８回会議　平成２７年１１月１９日（木）（宮城県自治会館）

・現地聴き取り調査結果の報告と意見交換
・意見書の構成について

小委員会　　平成２７年１２月１８日（金）（宮城県自治会館）

・第３３次意見書の全体構成と各章の検討について

第９回会議　平成２８年　２月　３日（水）（宮城県自治会館）

・第３３次意見書構成案及び骨子案について

小委員会　　平成２８年　２月１５日（月）（宮城県行政庁舎）

・第３３次意見書素案の検討

第10回会議　平成２８年　３月１７日（木）（宮城県行政庁舎）

・第３３次意見書第２次案について

第11回会議　平成２８年　４月２６日（火）（宮城県自治会館）

・第３３次意見書最終案について

第３３次宮城県社会教育委員名簿

（平成２８年３月１日　現在）

No	氏　　名	役　　職　　名
1	相 澤　美 和	富谷町中央公民館副館長
2	石 垣　政 裕	お父さんたちのネットワーク世話人
3	伊 勢 みゆき	ＮＰＯ法人まなびのたねネットワーク代表理事
4	小野寺　清隆	宮城県佐沼高等学校長
5	窪 田　恵 美	丸森町教員補助者
6	佐久間 祥 平	宮城県青年団連絡協議会監事
7	佐々木　賢治	美里町教育委員会教育長
8	佐々木　淳吾	東北放送アナウンサー
9	佐々木とし子	宮城県地域活動（母親クラブ）連絡協議会長
10	鈴 木　孝 三	色麻町立色麻小中学校長
11	梨 本 雄太郎	宮城教育大学教授
12	冨士原かよ子	大和町立鶴巣小学校長
13	星　　美 保	気仙沼市家庭教育推進協議会長
14	星 山　幸 男	東北福祉大学教授
15	増田　恵美子	宮城県ＰＴＡ連合会副会長
任　期	平成２６年５月１日から平成２８年４月３０日まで ※　名簿は五十音順。敬称略。	